11 片泊

日暮川・黒島の川と自然

黒島は、標高六二二mで最高峰の櫓(やぐら)岳と五〇〇m級の山が五つそびえる。いくつもの渓谷には川が走り、海に侵食された断崖を滝となって海に注ぐ❹。

数ある川のひとつ日暮(ひぐらし)川は、一九八七(昭和六十二)年に片泊の水源地として造成され❻、同地区全戸と牧場に水を供給している。樫の木や雑木に囲まれた水源地には、県の天然記念物であるミシマサワガニが棲み、また炭焼き窯の跡❸も残り、自然豊かな黒島の今昔を物語る場となっている。

日本固有種のサワガニ類は、純淡水種のカニで渓流❹に生息する。発生時に特徴があり、ほとんどのカニ類はプランクトンとして孵化し、海流などで拡散するが、サワガニ類は卵のなかで稚ガニまで成長する。そのためサワガニ類の子は親の生活圏から遠くへ分散しない。

この特徴から、島嶼へ分布するサワガニの遺伝子を調査することで、各島の成り立ちを考察できる。例えば、ミシマサワガニは宇治島・黒島・口永良部島に棲む。現在は海に阻まれた島に同じ遺伝グループのカニがいるので、太古には陸続きであったと推測される。

人の暮らしの隣りで、ゆっくりと自然の歴史が積み重なっている。

思い出話

「サワガニは川辺の石の下に蟹穴をほって潜んでいます。昔子供を川に連れてきて『この石の下を見てごらん』と言って遊ばせていました。」

片泊地区 六〇代 男性